

書名：この世界が消えたあと
の科学文明のつくりかた

著者：ルイス・ダートネル
訳：東郷えりか

出版社：河出書房新社
出版年月：2015年6月
総ページ数：347ページ
ISBN：9784309253251



推薦者

米延仁志
鳴門教育大学大学院教授
生活・健康系コース（技術・工業・情報）

出張で長旅のときは飛行機や電車の中でタブレット端末に放り込んである文献や本をよく読んでいます。ある程度贅沢なメモリーが必要になるけど、500グラム程度の端末に千冊を超える書籍を保存できるので非常に便利である。野外調査もデジタル化が進んだおかげで手書きのデータやスケッチを気遣いながら持ち歩く必要がかなり減った。インターネットが使えるときは地球の反対側からでも大学のサーバに調査のデータを送ることもできる。一方で、便利に使っていてふと考えることは、電気が無ければ何もできなくなっていることである。情報機器はその端的な例である。電気エネルギーに限らず、現代の紙パルプは和紙や羊皮紙に比べると格段に耐久性が劣る。“現場での実践力”なんてものは体系化した知識ではなく“そのへんにあるものでなんとかする”能力でしかないように思う。それでも必要な知識が利用できる形で残っていれば、格段に早くなんとかできるものである。

本書は、映画「マッドマックス」（あるいは日本なら「北斗の拳」か）のような文明社会が潰れた後の世界で“現代と同じような”文明をどのように復興するかということをシミュレートしたものである。著者はイギリス宇宙局に務める宇宙生物学者であり（本書出版時はレスター大学の研究員）、サイエンスライターでもある。章ごとに、農業や材料、医薬品など多岐にわたる“文明の必需品”を、いったん滅んだ世界でどのように再生産できるようにしていくかを、それらの技術の発達史をもとに理論的に構想、あるいは空想していく。技術史としても興味深い内容である。

もっとも復興というのは原状回復とはやや異なる。レジリエンス（回復力）という今や生態学や工学、心理学など多様な分野でキーワードになっているが、雑にいつてしまうと破綻状態から全く元の状態に戻るだけでなく、異なっても満足すべき状態への変化も含んでいる。また、世界には現代の（西欧的な）文明社会を好ましい状態と思っていない人々もたくさんいる。それでもなお、本書のような真面目な空想を世の中に提示することには意義があると思う。理由の一つは、少なくとも現代の日本人は、アイザック・ニュートンのいう“巨人の肩の上”に長いこといたおかげで、お膳立てがないと何もできなかつたり、外界の現実の変化に取り組むよりも既存のルールを守ることが大事になってしまいがちになっていること。もちろんそうでない人もいるけど。そこから先は興味を持って本書を読んだ人が考えてください。

